

【ひょう害の技術対策】

露地野菜

1 事前対策

予防策として、可能な範囲でトンネルやべた掛け資材等で被覆しておく。

2 事後対策

降ひょうにより傷がついた部分から細菌性病害が発生する可能性が高いため、被害直後から銅剤等細菌性病害に登録のある殺菌剤による予防散布を実施する。茎葉の被害が大きい場合は、全体の果実を摘み取り着果負担を軽減し、新葉や側枝の発生を促す。早勢回復のため、即効性肥料の追肥や液肥の葉面散布を行う。

被害があった場合は写真などで記録を残すとともに、区市町村へ連絡する。

果樹

1 事前対策

多目的防災網のある園では、早めに被覆する。ただし、ひょうが積もった重みにより、果樹棚が損壊する恐れがある場合は、網を切るなどの対処も必要である。

また、防鳥網（目合いが小さいもの）も被害をある程度軽減できるので、事前に被覆しておく。

2 事後対策

- (1) 葉、果実の傷痕から病害が発生しやすいため、早急に農薬散布を行う。
- (2) 果実が陥没したり、大きな傷により商品にならないものについては、それらの果実から優先的に摘果する。ただし、残果の果実品質や枝の遅伸びなど悪影響も考えられるため過度の摘果は避け、適正な着果量を維持する。
- (3) 太い枝の損傷部分は、塗布剤により保護する。枝が折れた部分は切り返すが、葉面積の確保のため、過度の枝や新梢の切り戻しは控える。
- (4) 主枝、亜主枝、予備枝先端の新梢が欠損した場合、新たな新梢発生・伸長を待ち育成する。

花き

1 事前対策

- (1) 4 mm 目合い程度のネットなどで被覆しておく。
- (2) 施設栽培においては、強風を伴うことが多いため暴風対策を併せて行う。

2 事後対策

- (1) 病原菌の侵入を防ぐため、殺菌剤の散布を行う。
- (2) 速効性肥料を追肥するなど、草勢の回復を図る。
- (3) 生育回復が望めない株は、そのまま放置すると病害虫の温床となるので、速やかに処分し補植を行う。